

日本における難民問題と共生の在り方
—群馬県館林市在住ロヒンギャ難民の事例からの展望—

早稲田大学政治経済学部経済学科
映像ジャーナリズム・高橋恭子ゼミ
戸恒幾汰

概要

シリアをはじめとしたイスラム圏においては紛争が多発し、大量の難民が発生している。欧州では難民流入による治安悪化が叫ばれ、難民受け入れの是非が問われている。米国では、2016年11月にトランプ氏が大統領選に勝利したことで難民・移民への対応が転換期を迎えている。日本において難民問題は縁遠いものとされているが、筆者はアフリカの地に赴き実際に難民と接したことで、日本も含めた世界各国が地球規模で取り組まなければならない問題であると認識を改めた。

諸先進国に比して日本の難民受け入れ数は極端に少ない。国際的な問題として各国が政策の議論を進める中、日本で難民問題の議論は活発化しないままである。政府ばかりか国民も難民問題に対し無関心な態度をとっているため、日本は難民の受け入れ数が極端に少ないままなのではないだろうか。

難民問題を私たち日本人はどう対処すればいいのかという問題意識を抱き、ルポルタージュ作成にあたった。本稿では群馬県館林市在住のロヒンギャ難民に焦点を当て、私たちとは縁遠い問題だとされている難民問題を身近な問題として再認識し、その上で日本は難民問題とどのように向き合っていくべきか、難民とどう共生していくべきなのかを考察する。

ロヒンギャ難民は母国ミャンマーにおいても国民として認定されず、バングラデシュを始めとする世界各国に難民として逃れている。日本では、200人程が館林市に集住している。彼らへのインタビューを通し、難民として認定されない「仮放免」だけでなく、難民として認定された後も「難民二世」が日本で生きていくためには多くの障壁が残っていることがわかった。また、複眼的な視点で難民問題を紐解くため、館林市民へのインタビューも行った。始めは難民に対し恐怖心を抱いていたが、直接触れ合うことで良好な関係を築くまでに至っていた。

彼らのケースを参考に、本稿では日本における難民との共生の在り方を展望していく。